

平田篤胤と薩摩——「天皇のもとつ御国」をめぐる頭と幽——

相澤　みのり

はじめに

平田篤胤が遺した歌を集めた『気吹舎歌集』には、「天皇の」からはじまる歌が三首みとめられる。このうち次にあげる一首は、篤胤と薩摩の関係からうまれた興味深い歌である。

天皇のもとつ御国に古ことの。みち栄ゆべき時は来にけり。〔新修平田篤胤全集〕一五卷、三二七頁。以下、全集

維新変革から遡ること四〇年ほど前、文政期の江戸において篤胤と薩摩の大名島津家との親交がはじまる。ここで篤胤が歌う「天皇のもとつ御国」とは、ほかでもない、薩

摩・島津家の領地をさしている。

いうまでもなく、薩摩は維新変革の中心的存在である。

この時代に立ち合った平田家二代鋳胤は、羽田野敬雄に宛てた慶応二年（一八六六）の書簡のなかで「此節薩の要路二居候者ハ大抵同門ニ御座候、御同慶可被下候^①」と述べており、その誇らしげな様子からは気吹舎における薩摩の存在の大きさがうかがえる。明治初年に気吹舎が閉鎖されるまでに薩摩の平田門人は一〇〇名を超え、その多さは同じく幕末の雄藩とされる土佐や長州などの比ではない^②。

筆者はこれまで、平田国学の「没落」の契機とされてきた平田派国事犯事件（明治四年・一八七二）以降の平田家の動向を追いながら、近代における平田国学の多様な展開に

ついて検討してきた^③。その際にたびたび看取されるのが平田家と薩摩との関係の深さである。明治ゼロ年代の皇学所設立や神祇官での活動、あるいは平田神社の創建などに際しても、薩摩の門人と平田家の繋がりが見受けられる。ほかにも幕末から明治にかけての活動は先行研究の文脈の中で重要な論点の一部としてあげられてきた^④。

その一方で、両者の関係を正面から論じる研究は双方の存在感に比して少なく、幕末史においても薩摩藩の平田国学の受容に検討が及ぶことはほとんどないといつてよい。

田崎哲郎はこれらを指摘し考察をおこなっているが^⑤、その後研究が引き継がれているとは言い難い状況である。また、篤胤と交流のあった薩摩藩の「蘭癖大名」島津重豪の学問に関する近年の研究でも、篤胤＝排仏主義者という認識の枠を超えることはなく、総じて関心の低さが否めない^⑥。

本稿ではかかる現状を念頭に、平田篤胤と薩摩を結びつけたものは何であったのかという問いから検討をはじめ、未だ十分に議論が及んでいないこの課題について、まずは「頭」の視点、つまり薩摩のおかれた地理的環境や幕藩体制下での外様大名という立ち位置と、篤胤の学問、外国研究などとの親和性、あるいは世俗的な繋がりを考察する。次いで、冒頭で示した篤胤の「天皇のもとつ御国」の認識から辿る「幽」の領域、すなわち島津家の系譜にまつ

わる言説や薩摩の神話解釈に関わる不可視の世界と、篤胤が没頭した異界・幽界の探求、神仙研究との関連性を検討する。その際に大きな意味をもつのが、島津家の領地にある霧島山と、そこに語られる『霧島山幽郷真語』である。

篤胤にとっての晩年の大きなテーマである玄学や神仙に関しては、小林健三、鎌田東二らによる研究に詳しく、また、それらを近代の神道系新宗教などに展開させて論じる斎藤英喜の研究も注目される^⑦。本稿ではこうした議論の根元となる篤胤自身の神仙への希求についても、薩摩との邂逅から見えるあらたな論点として俎上に載せたい考えである。

ただし行論にあたって、政治性・社会性と異界・幽界に関する思想とを別々のものとして扱う意図はない。当事者を主体とした同時代的な営みを尊重し、「頭」も「幽」も不可分であることを前提とする。この点は、三ツ松誠による幕末の政治運動と幽冥思想が無関係ではないという議論^⑧を、篤胤と薩摩の関係において探る試みとも位置づけられよう。

対外的な危機意識の高まりとともに、徳川将軍家による政治が綻びを見せはじめた近世後期、南九州の外様大名・島津家は次第に存在感を強めていく。篤胤が「天皇のもとつ御国」と表したその領地は、同時に、篤胤が執心する玄

学・神仙研究にとっても特別な場所であった。

一、平田篤胤と薩摩のはじまり

1 薩摩藩の小納戸と篤胤

平田篤胤が最初に薩摩藩と関係をもった正確な時期は明らかではないが、文政一〇年（一八二七）には桜田の薩摩藩邸に出入りしていたことが確認できる。この頃の「気吹舎日記」にたびたび登場する薩摩藩関係者は、「薩州侯医」の大橋菊庵である。越後柏崎出身の菊庵は藤林普山門下の蘭医で、越後与板藩と関わりのある人物である。

篤胤と与板藩との関係の始まりは早く、文化一二年（一八一四）には与板井伊家老の松下志摩定年が門人となっている。松下家は藩内随一の名門で、のちに家老職を継ぐ松下志摩定福（数馬）も篤胤の門人である。篤胤は志摩定年の父定船とも親交があったといい、松下家の求めに応じて系図「遠祖世々乃祖乃御名一卷」を作成謹記しているほか、井伊家が幸霊社を設ける際には、吉田家に許状を交渉するなど親しい関係が続いていた^①。

篤胤は松下とともに菊庵のもとを訪れるなどしているが、門人帳に「大橋菊庵」の名はなく、医者でもあった篤胤と同業の立場で交流していた可能性も考えられる。当時の江

戸では、複数の藩邸を出入りする医者や絵師などによる取次ぎがおこなわれており、篤胤と薩摩藩を結ぶ役割として菊庵が関わっていたとしても不思議ではない。ただし、本件においてその確証はなく、与板井伊家や松下家の関与の有無も明らかではない。

薩摩で最初に篤胤の門人となるのは、文政一二年（一八二九）入門の木村休右衛門である。「気吹舎日記」（文政一二年二月二日条）には「大橋喜十郎来、同藩の木村休右衛門鈴満と云人入門につれ来る、束脩其外品々土産ものあり^②」とあり、数日後には木村を連れてきた大橋喜十郎も入門している。木村はよく歌を詠み書物も書いていたとい、それらを見込まれてか、篤胤から薩摩の国元での教授を依頼されているほか、『古今妖魅考』三之巻には校者のひとりとしても名が刻まれている。木村はまた、篤胤のもとに霧島山に棲む女仙の不思議な話をもたらす約束をした人物でもあり、これがのちの『霧島山幽境真語』成立に繋がっていくことになる。この経緯は篤胤自らがその序文「幽郷真語はしがき」に記していることもあり、薩摩で最初の門人とその同行者は、おもに同書にまつわる人物としてみられてきた。

これに対し本稿では、木村を連れてきた大橋喜十郎が薩摩藩の小納戸を務めていたことに着目する。大橋喜十郎は

単なる薩摩出身者ではなく、藩主の側近として役目を任されていた人物であった。

2 世俗的關係

篤胤と薩摩藩の關係について、まずは世俗的な側面から検討してみたい。たとえば、篤胤による徳川御三家（尾張・水戸）への召し抱えの周旋活動である。このうち尾張藩からは、天保元年（一八三〇）七月に三人扶持が給せられることになるが、これに先立つ同年三月二日の「氣吹舎日記」には、「大橋喜十郎来、内願一件（尾張へ召出）

の御声掛、栄翁様へ御願可申内談出来に付、高縄御屋敷立花静庵方へ御迎に來れる也。則同道御出也、口上書・干菓子一折御持参、大橋へも御出」¹³との記述が残る。本件は屋代弘賢の仲介があったことが知られるが、右のとおり篤胤は薩摩藩へも働きかけを依頼しており、その際には大橋喜十郎も関係していた。

さらにこの翌年には、白金の薩摩藩邸で篤胤の講説もはじまっているほか、島津重豪八十八歳の祝賀の際には篤胤から、光格天皇の宸書とされる菊の墨絵が贈られ（全集一五、三六〇―三六一頁）、島津家からは篤胤に重豪が揮毫した「顕幽無敵道」という額が贈られている。『大道或問』『春秋命歷序考』などにもみえるこの言葉を篤胤は大層気に入

っており、島津家に所望したようである。¹⁵ またこの頃の篤胤は、島津家の紹介で寺社奉行脇坂中務少輔の屋敷に出入りし、重豪の次男で、やはり「蘭癖大名」といわれた中津侯奥平昌高とも親しく、著書も多く進献している。渡邊金造は重豪について「此人は不思議にも篤胤の説に傾倒して、彼を庇護し、尾藩へも紹介し、自藩士を彼の弟子にもした。篤胤門に薩州人の多いのは之が為である」と述べている。¹⁶ 篤胤にとつての薩摩藩は、大名をはじめとするさまざまな人脈を得ることができると有難い場所であったといえるだろう。

ではあらためて、島津家が篤胤の学問に興味を向けたのは何故なのか。そのひとつとして挙げられるのが、地理的環境に起因する問題である。三方を海に面し、南西諸島・琉球までをもその配下に置く薩摩は、中国や朝鮮との直接的な関係はもちろん、漂着民の保護や受け渡しの交渉、費用負担、海賊や密貿易など、長く危機意識とともに外国に対峙してきた。外国船の問題は、早くは寛政九年（二七九七）の英測量船プロヴィデンス号の琉球寄港などがあり、のちに弘化元年（一八四四）には、仏船アルクメーヌ号が同じく琉球に來航し、通信・貿易を要求する事件も起きている。薩摩はベリール來航より約一〇年も早く「開国」の問題に直面することになる。

篤胤の著作の多くが対外的な危機意識のもとに著されており、これが幕末の情勢に共鳴し平田国学が広まる要因のひとつとなることはすでに明らかにされている。¹⁷ こうした点からも対外情報に敏感な薩摩において、篤胤の学問が比較的早い時期から受容されることは理解に難くない。また、篤胤と親しかった最上徳内が平田家を来訪したその日に、篤胤が薩摩藩邸に赴いている記録もあり、蝦夷やロシアの情報も篤胤を介して薩摩に共有されていたことも推察される。反対に、薩摩が集めた情報や知識を篤胤が得ていた可能性も考えられよう。¹⁸ 彼らが抱く興味には、外国の事物への好意的な評価も含まれていたはずである。

このほか、篤胤の書物が琉球にもたらされていたことに触れておきたい。天保三年（一八三二）の「気吹舎日記」には琉球の正使が江戸に参府した際のことの次のように記されている。

大橋喜十郎、琉球正使豊見城為王子へ謁見、玉たすき・開題記・神拝詞記・大祓詞正訓、其外、書面数部贈り、数条物語、古学弘メ方之事迄承知にて、以来年々文通いたし、書物等も此方より贈り可申、彼国之用向ハ相弁じて申段、王子被申候由、猶又、正輔使與那覇親雲上と云人ニも逢ふ、此人ハ、年輩にて哥よミなるよし¹⁹

右のとおり、ここで登場するのも大橋喜十郎である。この年はいわゆる「琉球物」とよばれる出版物が江戸期のうちでもっとも多く刊行されるなど、広く琉球への関心が高まった時期であった。²⁰ その琉球に対して篤胤の古学を広める活動が、薩摩を介しておこなわれていたのである。

二、「天皇のもとつ御国」

1 篤胤と「薩州殿」

対外意識や自国意識と同様に、近世における地域意識の覚醒も重要な論点である。²¹ その意味からも、薩摩の自意識について篤胤がどのようにとらえていたのか、あらためて本稿の冒頭で紹介した歌に立ち戻り、これを詠むに至った経緯から紐解いてみたい。

その際に重要な役割を果たすのが、大橋喜十郎の上役にあたる薩摩藩の小納戸頭取、吉井七太夫である。『贈正一位島津斉彬公記』に「公幼年の時代特に仕侍し愛護の任を尽したるの事蹟は。侍臣吉井七太夫の遺記に存す。七太夫は公父斉興公に仕へ小納戸頭取たり。公母弥姫の婚嫁より公の出生前後に亘り親しく勤仕の労を積みたる人たりと謂ふ²²」とあるとおり、吉井は当時の藩主島津斉興にとって、もっとも身近で信頼のおける側役のひとつであった。

その吉井が初めて平田家を訪れたのは、文政一二年（一八二九）十一月一日である。この日の「氣吹舎日記」には「大橋氏吉井七太夫と云人同道にて入来、此仁は御小納戸頭取役にて、書物進献の事に付来れる也」²³とあり、前日には大橋喜十郎が平田家にわざわざ案内の使者を寄こしている。吉井の来訪は特別であった。そしてその数日後、篤胤のすべての書物が吉井のもとに持ち込まれ、同月二三日には篤胤が「薩州殿」に挨拶に向かっている。当日の「氣吹舎日記」には、「薩州殿へ書物進献為御挨拶、御国織の島八丈二反賜はり、吉井七太夫より手紙添来る、同人より永良部島芭蕉布一反贈らる」²⁴と記されている。

この一件について篤胤が残したと考えられるのが、次に示す『氣吹舎歌集』の一節である。

日向大隅薩摩の三国をしらす。大名もちと世に称へ申す守の殿の。古こと字びを好み給ふと聞て。御もと人吉井ぬし、て。我が著はせる古史成文をはじめ。書どもくさく奉りしかば。名はとくきき知りて有きとめで宣ひて。御めし八丈と聞ゆる絹。ふた巻賜ひたりけるを。衣物に縫はせ著て。吉井ぬしがり。よろこび白しに参る門いにて。
もの、ふのいや丈の絹たばり著つ。いでいや猛き道にあえなむ。いでいや広きかげを仰がむ。

後に聞けば。奉れる書どもは見給ひをへて。めでの御さかりに。此書はも。国人にも見せよとてその御国におくり給へる由なるに。喜しさ云はむ方なくて。天皇のもとつ御国に古ことの。みち栄ゆべき時は来にけり。²⁵（全集一五、三三七頁）

進献した書物が「薩州殿」に受け入れられた。返礼の品もさることながら、篤胤は「国人にも見せよ」と自身の書物が「その御国」（薩摩の国元）に送られたことを大いに喜ぶ。そして「天皇のふるさとに古道が栄えるべきときが来た」と詠うのである。篤胤の「天皇のもとつ御国」が「薩州殿」の領地を指していることは明らかであろう。一見、日本という国に対するものとも読めるこの歌は、薩摩・島津家の領地を称えて詠われている。実際に「薩州殿」に届けられたのかは定かではないが、篤胤がその領地を「天皇のもとつ御国」とらえていた事実は看過できない。やや唐突にも思えるこの認識は、どこからうまれたのであろうか。

2 島津家の系譜認識

吉井七太夫が仕える藩主島津斉興は重豪の孫であり、幕末に名を馳せる斉彬・久光の父親にあたる。文化六年（一八〇九）から嘉永四年（二八五二）までの長きに渡って藩主の座にあり、また島津家の系譜に対し特段に強いこだわり

を持っていた人物としても知られる。その熱意は斉興が自らまとめた島津家の歴代藩主の「系譜略」⁽²⁶⁾からもうかがうことができる。

ここにいう系譜とは、『寛永諸家系図伝』『寛政重修諸家譜』などに認められる薩摩藩の公式見解で、始祖である島津忠久が源頼朝の落胤であること、すなわち島津家が清和源氏の嫡流であるという主張をさす。重豪の命によつて鎌倉に頼朝と忠久の墓所が修築・創出されたことでもよく知られる、島津家の確固たる系譜認識である。一方で、これを偽史とする向きもあり、『大日本史』には「非頼朝子明矣」「忠久広言之子」と記された。これに対し島津家は「家伝」と相違するとして水戸徳川家に働きかけをおこな⁽²⁷⁾い、最終的に補入というかたちで対応がなされている。

島津家のこうした振舞いについては、外様大名という立場から少しでも徳川將軍家との繋がりを強化したい意図があったとの指摘がある。もとより近衛家との関係構築を強めてきた島津家であり、重豪は將軍家斉の御台所である広大院（茂姫）の実父として権威づけに力を注いできた。また、幕藩体制下での歴史的相関図のなかで、徳川將軍家よりも島津家のほうが源氏として正統であるとの主張を読み取る考察もある。⁽²⁸⁾ いずれも首肯できる見解であるが、ここでは清和源氏の嫡流とする島津家の主張を、天皇家の正統

な血筋であるという自意識として解釈してみたい。⁽²⁹⁾

これについて時代は下るが、薩摩出身の重野安繹が明治四一年（一九〇七）におこなった講演記録⁽³⁰⁾が興味深い。薩摩藩士たちが島津忠久についてどのように考えていたのかを述べたもので、次のような事例が挙げられている。

安政一、二年頃、『大日本史』の記述に思うところがあつた日下部伊三次が、島津家始祖は「皇孫」「頼朝の落胤」「惟宗広言の胤」のいずれかと問う「鬪」を引く。その結果、日下部は「皇孫」を引き当てた。あまりの嬉しさに急いでこれを西郷隆盛に伝えたという。西郷は重野にこの出来事を話し、その際に「イヤ私は鬪を取らずとも皇胤であると云ふことは能く知つて居つて疑ひはせぬと言ひました」と説明したとのことである。

厳格な考証家として知られる重野が「是は実談でありますから序に御話申して置きます」といつて披露したこの逸話は、近世後期の薩摩藩士たちの認識を理解するに十分であるろう。小納戸に門人をもつ篤胤も当然これを承知していたと考えられる。始祖を皇孫（皇胤）とする島津家の系譜認識が、篤胤が「天皇のもとつ御国」と詠うひとつの要素であつたとみてよいだろう。

3 天孫降臨の地

続いて、篤胤の神話解釈からも検討をおこなってみたい。着目するのは天孫降臨の地についてである。

既知のとおり、『古事記』『日本書紀』の叙述からは天孫降臨の地（高千穂）を明確に特定することは難しい。近世以降、概ね日向国臼杵郡（延岡領）と大隅国霧島山（島津領）のいずれかで議論されている問題である。

これについて本居宣長は、『古事記伝』十五之卷のなかで『日向国風土記』（逸文）などを参照し検討したが、臼杵郡が霧島山かどちらか一方には決めがたいとして一旦明言を避けている。その後、同書十七之卷では高千穂山は二カ所あったという解釈を用い、「路次を以て思へば、初に先降着賜ひしは、臼杵郡なる高千穂山にて、其より霧島山に遷坐て」と、臼杵郡に天降りした後に霧島山へ移動したとの説を唱えるに至る。

宣長を師と仰ぐ篤胤もまた、『古史徴』（文化一四年・一八一七成立）などで同様の見解を示すとともに、『日本書紀』卷之第二第九段の正書、第四の一書、第六の一書の三説を「誤り伝へ」（全集五、四二八―四二九頁）と述べ、宣長の移動説に補強を加えている。

一方、薩摩の国学者の嚆矢といわれる白尾国柱（宝暦一二年・一七六二―文政四年・一八二二）は、天孫が降臨した

地はあくまでも「霧島嶽」であるとして、著書『寛藩名勝考』（寛政七年・一七九五成立）のなかで、宣長は現地の地理に暗いのだと指摘する^{③②}。また、薩摩藩の御記録方が編纂した地誌『三国名勝図会』（天保一四年・一八四三成立）でも、天孫降臨の地が霧島山であることは明白であるとして、宣長の説を「謬説」と批判している。さらに同書では篤胤に対する語気がより強く、「其説本居氏が謬説を承りて、更に妄見を加ふるなり」「平田氏は、書紀の三説を皆破て誤り伝とす、是妄説の甚しきなり」「皇国の事跡、日月地に墜ると斉しきなり」などと非難の言葉が繰り返される。

篤胤への批判が特に厳しい背景には、『三国名勝図会』の編纂が、篤胤が幕府に咎められ秋田に帰還を命じられていた時期に重なることや、薩摩藩内の学派対立なども考慮すべきであろう。だがそうした点を差し引いても、やはり薩摩の反発は強い。天孫が降臨した聖地、つまり高天原と地上を繋ぐ場所が自領内にあることは、島津家の始祖を皇孫とする薩摩のアイデンティティにふさわしいあるべき姿であり、特に藩の役人である御記録方にとっては、決して譲ることができないのである。ここでは『大日本史』の記述に反発した前例も想起されるだろう。

対する篤胤にとってみれば、天降りの地がどちらであろうとも、天孫が坐した尊い場所が島津家の領地にあったと

する理解は揺るぎない。むしろ国覓の末に選ばれた地であることにこそ意味を見出すこともできるはずである。薩摩側の見解と相違する部分があるとしても、霧島山をめぐる天孫降臨の神話が、篤胤が「天皇のもとつ御国」と表するもうひとつの大きな要素であったと考えられる。前述の重豪八十八歳の祝賀の品にも、篤胤は「はた遠つ天皇祖命のはじめて天降りまして。八千世おはし座せりし。三つの御国をしろし召せるに。まして琉球の国をさへに治め給ふ。御祿の大きなるは申すも更なり。そがうへに。御齡また雲の上に。たぐひなくおはし座すを」(全集一五、三六〇頁)などと添えており、天孫降臨の神話と島津家とを確かに結びつけているのである。

三、『霧島山幽郷真語』

1 幽郷との邂逅

天孫が坐したとされる霧島山には、趣の異なるもうひとつの顔がある。女仙の暮らす幽郷である。この女仙のもとに往来する男(善五郎)の不思議な話は、おぼろげながら文化年間に篤胤に伝わっていた。篤胤はその詳細を切望していたが、漸く手掛かりを得るのは天保期である。当初、薩摩で最初の平田門人である木村休右衛門が調査し篤胤に

伝えることになっていたが、約束が果たされぬまま木村は没してしまい、篤胤がこれ入手するのはその後であった。

天保二年(一八三一)八月七日の「気吹舎日記」には「薩州、池田六左衛門来、霧嶋の仙女の事を八田喜左衛門知紀と云人の筆記幽冥正話と云もの持来、兼て頼ミたるに仍て也³⁴⁾」とある。文中の池田六左衛門は木村の紹介で門人となった人物である。その池田が持参したのが、八田知紀が著した「幽冥正話」であり、これがのちに『霧島山幽郷真語』となる。薩摩の歌人で国学者の八田は篤胤の門人ではないものの、池田を通じて篤胤の求めに応じ、現地で聞き取りをおこない幽郷の様子を記録した³⁵⁾。

このように『霧島山幽郷真語』の成立経緯は少々紛らわしく、本文自体も篤胤が著したものではないためか、同じ異界の話でも『仙境異聞』などに比べ注目度は概して低い。しかし、この話は薩摩の門人たちとの交流から篤胤が長く待ち望んだものであり、そしてなによりも、霧島山は高千穂であり、天孫が坐した場所である。篤胤は『霧島山幽郷真語』をどのようにとらえていたのか、篤胤自らが著した冒頭の「幽郷真語はしがき」をたよりに考察してみたい。

なお、検討に入る前に、篤胤が関わった異界・幽界に関するほかの書物、『稲生物怪録』『勝五郎再生記聞』『古今妖魅考』や、関連する出来事の一部を整理しておく³⁶⁾。

文化三年（一八〇六）霧島山の女仙の話を伝え聞く。『稲生物怪録』序を記す

文化九年（一八二二）『霊能真柱』成立

文政三年（一八二〇）『古道太元顕幽分属図説』成立。天

狗小僧寅吉に初めて会う

文政四年（一八二二）寅吉らとともに浅間山登山

文政五年（一八二二）『密法修事部類稿』一・二、『仙境

異聞』『古今妖魅考』草稿成立

文政六年（一八二三）再生人勝五郎と初めて会う。『勝五

郎再生記聞』成立

文政七年（一八二四）『五岳真形図説』『黄帝伝記』稿本

成立

文政八年（一八二五）『葛仙翁伝』稿成立

文政一〇年（一八二七）『赤県太古伝』稿本成立

文政一一年（一八二八）『古今妖魅考』稿本成立

文政一二年（一八二九）木村休右衛門入門。『天柱五岳余

論』稿、『三神山余考』稿成立

天保二年（一八三一）『幽冥正話』到来

篤胤が最初に霧島山の話を伝え聞いてから「幽冥正話」が到来するまで、二五年もの年月が経過しており、この間に仙童寅吉や再生人勝五郎らに出会っていることがわかる。

2 『霧島山幽郷真語』と玄字・神仙

「幽郷真語はしがき」は、まずこの話を入手するまでの説明からはじまり、次のように続く。

己もとより然るすぢの事どもは、おほろかに聞ながし得ぬ性なれば、いかで其をのこに直に逢て、問はゞやと思へど、国放れ、ばせむ便なく、せめてはその伊木氏に、たゞに聞ばやと思ふに、其つてさへなくて過しぬるを、其後つねに此事を忘れず、年ふる間に、顕世幽世のさかひ別なる故由をも、すきく委く思ひ得るに就ては、霧島山なる神界のことの、いかでくと思ひわたりけるに（全集九、六四三頁）

長年にわたる異界・幽界への探求心があらわされ、はじめて話を聞いて以来「霧島山なる神界」のことを「いかでく」、つまり「どうなんだ、どうなんだ」と常に思い続けていたことが語られている。そして、続く後半に向かっては「真語」の語とともにさらに「神」「神仙」が強調されていく。

然るは神世の神たち、既に顕幽わかりてこそ現には見え給はね、神ながら常しへに鎮まり坐ますこと、何か疑思ふべき。然るを今の凡人の、其御形を見奉る事なき故に、崩御ましつとおもはむは、最も忌々しく愚なる心なりけり。（中略）あはれ我党の人々よ、是等の真

語を承賜はりて、今しも神世の神々の、人の目にこそ見えまされ、堅石に常石に御坐すべき理を辨へ、人の世となりての後も、千世万世も長らふる神仙の多く坐ます事をも知り、また幽世の有状の、靈く畏き事をも悟りねかし。(全集九、六四五頁)

篤胤は、目に見えないからといって神々が崩御されたと思うのは「最も忌々しく愚なる心」と断じ、神の实在を印象づける。不可視の世界もたしかに存在するという主張は、すでに『靈能真柱』(文化九年・一八二二成立)に認められるが、そこで用いられているのが「幽冥」「冥府」であるのに対し、「幽郷真語はしがき」では「神世」「神仙」の語が頻出する。

この点について着目すべきは篤胤の道教・玄学研究とその思想である。土屋昌明は『黄帝伝記』『天柱五岳余論』などの篤胤の著書の分析から、『靈能真柱』に描かれた幽冥界が道教文献を使つて再解釈されていることを指摘し、中国の神仙思想は日本の神道が伝わつたものであるという篤胤得意の論理展開を明らかにしている。³⁷⁾『史記』『資治通鑑』などから黄帝に関する記事を註解した『黄帝伝記』のなかで、篤胤は「元始天尊と称する神は天御中主大神に坐ことはまた疑ひ無し」(全集八、八一八頁)と述べ、神仙の最上位にあたる元始天尊と天御中主大神を同視する。三天

太上君は皇産靈神、幽冥界の主宰神東王父は大国主神である。幽冥界はその上層部に天界を冠しており、仙界のヒエラルキーが備えられるのである。「見えない世界」は幽冥論だけではとらえきれない。

『靈能真柱』が成立したのち「幽冥正話」を得るまでに神仙や玄学の研究に没頭し、『黄帝伝記』『葛仙翁伝』『赤県太古伝』『天柱五岳余論』『三神山余考』などを著していることは、篤胤にとつての霧島山を考えるうえで重要な意味をもつ。それは、不可視の領域が拡張し融け合つていく経過ともいえるだろう。

3 「然る事ならざるを如何せむ」

ここでもうひとつ、文化三年(一八〇六)の『稻生物怪録』の序文を確認してみたい。篤胤が霧島山の女仙の話を最初に伝え聞いた頃のもので、文末にかけて次のように記されている。

もの知れる人は、をことやいはむ、しれものとやいはむ。そはとまれ、あとあるを、いかにかはせむ。かばかり怪き天地の中にて、おのが身のあやしきをさへ、えしらぬ人のさとりなるをや。³⁸⁾

注目したいのは「あとあるを、いかにかはせむ(跡あるを、如何にかはせむ)」との問いかけである。『稻生物怪録』

は主人公の平太郎のもとに現れた物怪たちの姿が印象的な挿絵で描かれていることでも知られ、先行研究においても篤胤による幽界の痕跡への意識が指摘されている⁽³⁹⁾。目に見えないが実在する、それを証明しようとするものである。

こうした点に留意しながら「幽郷真語はしがき」を読んでみると、やはりこちらでも「現には見え給はね」「其御形を見奉る事なき故に」「人の目にこそ見えまされ」と、目に見えないことが重ねて表現されていることがわかる。

また、本文中では、女仙のもとに通う善五郎が菓子や銀の小槌を貰って帰るなど形あるものを経験し、「女神のおはす宮」の様子も具体的である。見えない世界の実在を示す描写といえるだろう。しかしこれらについて、篤胤はもはや「あとあるを、いかにかはせむ」と読者に迫ったりはしない。かわりに「幽郷真語はしがき」では次のように述べる。

抑神の御上は、神の御典を読伺ふまゝに、最も尊くいつも畏き御事とは、想やり奉らるれど、正目に拝み奉らむには、又殊にその尊さの類ひなく、其御稜威の弥増りておはし坐さむとは、惟ひ奉るものから、然る事ならざるを如何せむ。しかるをこの善五郎をのこ、又さきに寅吉と云へる童子の、あまた年ある神仙に仕へ奉れるなどは、正しく神の許して、其界に入しめ給へ

るなれば、殊なる御霊を蒙れるにぞ有べき。(全集九、六四五頁)

目に見えない神々を「正目に拝み奉らむ」という思いとともに、「然る事ならざるを如何せむ」と訴えかけるのである。善五郎や寅吉には見えてなぜ自分には見えないのか、彼らのように往来が許されるにはどうしたらよいのだという篤胤の渴望、神仙界への憧憬ともいえよう。

このように篤胤の心情が高揚していく過程に、浅間山での体験があったことを指摘しておきたい。神の痕跡を天之石笛などの物証にもとめ、不可視である幽冥界を古文獻によって証明することを試みていた篤胤は、文政四年(一八二二)四月、仙童寅吉とともに彼の師仙の本拠地である浅間山に登る。そして帰山後に、師仙「日々津高根王御神」の神影を描かせた。篤胤が記したその「由来記」からは、見ることに叶わない師仙の姿を絵にすることで、なんとか「正目に拝み奉らむ」としていただく⁽⁴⁰⁾がえる。そしてついに霧島山の「真語」を得るに至り、「然る事ならざるを如何せむ」とその思いを吐露するのである。

『霧島山幽郷真語』については、折口信夫が「平田国学の伝統」⁽⁴¹⁾のなかで触れていることでも知られており、ここでの折口による篤胤評価を相良亨が民俗学の視点で論評したことは、以降の平田国学研究に新たな可能性を与える契

機となった⁽⁴²⁾。他方、小林健三は折口の「人間界の外に、日本人が考へてゐた、別のものがあるといふことをば調べようとした。つまり仙人、山の神、みな同じものです」という言葉の趣意から、これを篤胤の玄学論へと広く展開させ、道教や神仙研究について詳細に分析している⁽⁴³⁾。このほか、篤胤の古道学に注目し『密法修事部類稿』などにある実践的な修法について、より具体的に迫った研究もおこなわれている⁽⁴⁴⁾。このような視座でとらえると、篤胤の玄学や神仙研究の流れを汲むという宮地堅磐の「宮地神仙道」や本田親徳の「霊学」、さらには大本教などの神道系新宗教の思想や実践のなかに、「然る事ならざるを如何せむ」から連なる希求の脈動を見出すことができる。堅磐と同族で宮内省掌典でもあった宮地厳夫は、鉄胤がまとめたとされる『平田家二十五部秘書』の継承を自負したといい、著書『本朝神仙記伝』では『霧島山幽郷真語』を「特に正しき書なり」と述べ、解説もおこなっている⁽⁴⁵⁾。

加えて霧島山は、ほかの異界・幽界とは圧倒的に異なる別次元の要素を内包する。いうまでもなく、天孫降臨という天皇の系譜に繋がる神話である。島津家の領地を「天皇のもとつ御国」と認識する篤胤が、女仙が棲む霧島山と神仙界の構図とを結びつけ、思考を巡らせていたことは確かであろう。

天孫・神仙・幽界の交錯は、『霧島山幽郷語』巻末の三浦千春による一文、「此霧島は皇孫命の天降りましける山にて、いと奇異き事ども多く、今現に幽界ありて神仙いますことは、世にも知る所なるが」(全集九、六五七頁)にも現れる。これは八田知紀の言葉を記したもので、前後の内容から慶応期以降のものと推察される。篤胤と同時代の著述ではないものの、むしろ後世に及んで「皇孫命の天降り」と「幽界」「神仙」がともに語られていることは意味深い。

おわりに

ここまで、平田篤胤と薩摩との関係を「天皇のもとつ御国」とともに追ってきた。「顕」の世界では、大名島津家をはじめ多くの人脈が認められ、彼らとの現実的な交渉の背景に、薩摩で先行する対外危機意識や外国の事物に対する関心の高さがあったことを確認した。また、徳川御三家への召し抱えの周旋など、篤胤も島津家同様に、近世後期の実社会のなかで立場の向上を目指していた。上流層の武士たちとの親しい交流はもちろん、篤胤の学問が彼らに支持されていた事実も等閑に付すべきではないだろう。

一方、薩摩における「幽」の領域である「霧島山なる神

界」との邂逅も、篤胤にとって優れて大きな意味を持つものであった。文献をもとに天孫降臨について検討した篤胤は、薩摩の人々のフィールドワークを通じて霧島山の幽界の「真語」を得るに至る。ここでは、島津家と天皇を繋ぐ系譜認識も重要な要素として浮上する。

篤胤にとっての薩摩は「顕」と「幽」のいずれにおいても極めて重要で魅力的な地であったに違いない。そしてその「顕」と「幽」は、分かつことなく交わり合っていたといえるだろう。

「目にはみえないが実在する」領域への関心や、不可視の領域に対して存在の根拠を求めることは、一八世紀後半から一九世紀にかけて顕著となった時代潮流といわれる。⁴⁶

これを広く解釈すれば、島津家による始祖の墓所創出や系譜の明文化に対するこだわりも、目に見えない血脈を言説だけに留め置くのではなく、その正統の証を顕現させようとする行為として理解できる。

またその意味では、島津家にとって神々の陵墓も自領内になくしてはならず、実際に重豪は白尾国柱に神代三陵の調査を命じている。のちの藩主斉彬もこれを引き継ぎ、八田知紀、後醍醐真柱らが調査をおこなった。⁴⁷そして、維新変革後の明治七年（一八七四）には、明治政府によって神代三陵のすべてが島津家の領地内に治定され、同時期には県

社であった霧島神社が霧島神宮と改称し官幣大社に列格される。⁴⁸ いずれの決定にも教部省などの薩摩出身者の力が大きかったことは疑いなく、近代において薩摩のアイデンティティが具現化されたといってもよいだろう。⁴⁹

ただし、こうした近世から流れを単純に一連のものとしてとらえることはできない。明治期の決定は当時の政治状況に関わる営為であり、近世における地域の自意識とは趣意が異なる。つまり徳川時代とはまったく別の、天皇を中心とした国家体制構築の過程で「天皇のもとつ御国」がアピールされたものといえる。霧島神宮の列格は、それまでの神社秩序の解体によってもたらされた。神社も陵墓も、近世に地域が求めた起源神話や在地の信仰とは異質の、国家による神道政策のなかに位置づけられていくことになる。従来、平田国学の神道思想はこうした近代の神道政策に与えた影響として重視され、多くの優れた論考のなかに置かれてきた。⁵⁰ だが、それだけがすべてではない。本稿でみてきたように、篤胤の神学には彼が晩年に求めてやまなかった神仙という到達点があり、その執心はのちの時代に現れる多様な神道へと受け継がれていく。篤胤の表した「天皇のもとつ御国」には、近代の国家が介入する神道と、そこから逸脱する神道への展開のいずれもが内在しているのである。

天孫・神仙・幽界そして現実世界が絡み合う篤胤と薩摩のあいだには、これまで認識されてきた以上の多角的な議論の可能性が広がっている。「天皇のもとつ御国」は続く時代にどのような姿でその意味をもたげてくるのか。引き続き、平田家の次の世代である鋳胤・延胤・胤雄と、薩摩の没後門人たちとともに検討していくことにしたい。

* 平田篤胤の著作については、『新修平田篤胤全集』（名著出版）を用い、引用文末に（全集巻数、頁数）の形で示した。また、漢字は適宜通行の字体に改めた。

注

- (1) 田崎哲郎「史料紹介 平田家から羽田野敬雄宛書簡」『愛知大学総合郷土研究所紀要』第五〇輯、二〇〇五年、一九九頁。
- (2) 渡邊正『薩摩の国学』（黙遙社、一九八六年）一六―二六頁。
- (3) 拙稿「平田国学の明治——平田胤雄と本教教会をめぐって」『佛教大学大学院紀要 文学研究科篇』第五〇号、二〇二二年。同「明治の平田家、平田胤雄と印行社」（山下久夫・斎藤英喜編『平田篤胤 狂信から共振へ』法藏館、二〇二三年）。
- (4) 宮地正人『幕末維新変革史』上・下（岩波書店、二

〇一二年）、同『歴史のなかの「夜明け前」——平田国学の幕末維新』（吉川弘文館、二〇一五年）。阪本是丸「明治維新と国学者」（大明堂、一九九三年）。中川和明『平田国学の史的研究』（名著刊行会、二〇二二年）。三ツ松誠「平田神学の遺産」（『宗教研究』第九二号二輯、二〇一八年）ほか。

(5) 田崎哲郎「薩摩藩の学問についての若干の考察」（『日本歴史』第七二〇号、二〇〇八年）。

(6) 鈴木彰・林匡編『島津重豪と薩摩の学問・文化——近世後期博物大名の視野と実践』（アジア遊学一九〇、勉誠出版、二〇一五年）など。

(7) 小林健三『平田神道の研究』（古神道仙法教本庁、一九七五年）。鎌田東二『平田篤胤の神界フィールドワーク』（作品社、二〇〇二年）。斎藤英喜「近代異端神道と『古事記』——本田親徳を起点として」（清川祥恵・南郷晃子・植朗子編『人はなぜ神話（ミユトス）を語るのか——拡大する世界と（地）の物語』文学通信、二〇二二年）。同「神仙・調息・ファシズム——平田篤胤と近代異端神道をめぐって」（山下・斎藤編前掲書（3））。同「異端神道と日本ファシズム」（伊藤聡・斎藤英喜編『神道の近代——アクチュアリティを問う』アジア遊学二八一、勉誠出版、二〇二三年）ほか。斎藤はこれらのなかで「近代異端神道」という概念を提起している。このほか、三ツ松誠「寅吉を

めぐる冒険」(山下・斎藤編前掲書(3))における議論も
注目される。

(8) 三ツ松誠「異国と異界——安政期の三輪田元綱」(『神
道宗教』第二一六号、二〇〇九年)。同「嘉永期の気吹舎
——平田篤胤と『幽界物語』」(『日本史研究』第五九六
号、二〇一二年)。同「神々は沈黙せず——平田派神靈事
件考」(『歴史学研究』第九四〇号、二〇一六年)など。

(9) 渡邊金造『平田篤胤研究』(鳳出版、一九七八年。初
版一九四二年)一〇一六頁。

(10) 森納「藤林普山とその子孫、門人録」(『日本医史学雑
誌』第三八巻第四号、一九九二年)一九頁。渡邊前掲書
(9)一〇三五頁。

(11) 伊東多三郎『国学者の道』(野島出版、一九七二年。
初版一九四四年)一九八—二〇三頁。渡邊前掲書(9)二六
九—二七〇頁。池上大「『与板藩史』上巻(与板藩史刊行
会、一九八二年)三四二—三四三頁。同下巻、四九—六〇
頁。

(12) 渡邊前掲書(9)一〇六五頁。

(13) 同前、二六三頁。引用中の括弧は原文。「栄翁」は重
豪の号。

(14) 「平田国学の再検討」(宮地正人編『国立歴史民俗博
物館研究報告』第一二八集、二〇〇六年)三四頁。篤胤の
講説対象は無学な庶民だけではない。吉田麻子『知の共鳴

——平田篤胤をめぐる書物の社会史』(ベリかん社、二
〇一二年、二八五頁)では、篤胤の講説が儒学・漢学の素
養のある武士層に向けても行われ、受け入れられていたこ
とが考察されている。

(15) 「顕幽無敵道」の額は渡邊前掲書(9)口絵写真、解説
は一八一—一九頁。「気吹舎日記」天保四年一月一日条
「大橋彦太郎(喜十郎に同じ…筆者注)来、兼て高輪へ願
ひたる 栄翁様御代筆之額出来二付、持参也」(前掲報告
(14)七四頁)、同年十二月一日条「父君御印三出来、顕
幽無敵道、イフキノヤノアルシ、大壑平篤胤印と云の也」
(同前、八九頁)とある。

(16) 渡邊前掲書(9)二六一頁。同前、「一〇、篤胤と交渉
ある諸侯」参照。

(17) 宮地正人「伊吹廼舎と四千の門弟たち」(米田勝安・
荒俣宏編『別冊太陽 平田篤胤——知のネットワークの先
覚者』平凡社、二〇〇四年)ほか。

(18) 前掲報告(14)五〇頁。桂島宣弘は『千島の白浪』と
幕末国学」(『自他認識の思想史——日本ナショナリズムの
生成と東アジア』有志舎、二〇〇八年)で、篤胤のロシア
研究について主にその著作から論じているが、篤胤と薩摩
藩をはじめ諸藩における外国情報の把握状況の実態なども
ふまえればさらに検討できる余地があろう。このほか北方
情報収集については、星山京子「国学者の西洋研究とナシ

ヨナル・アイデンティティ」(川久保剛・星山京子・石川公彌子『方法としての国学——江戸後期・近代・戦後』北樹出版、二〇一六年)など。

(19) 前掲報告(14)六三頁。

(20) 横山學「解題参考論文集成「琉球物と琉使来聘」」(『江戸期琉球物資料集覧』第四卷、本邦書籍、一九八一年)。

(21) 若尾政希・菊池勇夫編『〈江戸〉の人と身分5 覚醒する地域意識』(吉川弘文館、二〇一〇年)。山下久夫「近世神話」と篤胤」(植朗子・南郷晃子・清川祥恵編『神話』を近現代に問う』アジア遊学二二七、勉強出版、二〇一八年)。

(22) 寺師宗徳『贈正一位島津斉彬公記』(村野山人、一九〇八年)一〇頁。

(23) 渡邊前掲書(9)一〇九一頁。

(24) 同前、一〇九二頁。

(25) 国立歴史民俗博物館所蔵「平田篤胤関係資料」(H-1615-4-1-15-12)に草稿が残る。

(26) 『斉興公御自記』(東京大学史料編纂所所蔵、島津家本やI-12-33-174)。鈴木彰「島津斉宣と斉興、その藩主としての祈り——〈重豪の時代〉の再定位に向けて」(『島津重豪——薩摩を変えた博物大名』鹿児島歴史資料センター黎明館、二〇一三年)一五九頁。このなかで論じられ

ている島津家に伝わる「虎巻ノ秘法」も系譜意識を理解するうえで重要である。

(27) 芳即正『島津重豪』(吉川弘文館、一九八〇年)一九頁。一連の経緯は、岸本覚「近世薩摩藩祖廟と島津重豪」(鈴木彰・林匡前掲書(6))に詳しい。広言は惟宗広言のこと。

(28) 岸本前掲(27)一二七頁。鈴木彰「藩主島津斉興を問うなす——島津家第二十七世としての文武の実践」(『近世文藝』第一〇八号、二〇一八年)四六頁。

(29) 栗林文夫「島津斉興の密教受法について——玉里島津家資料の「御仏間道具」について」(『甦る島津の遺宝——かごしまの美とこころ』鹿児島県歴史資料センター黎明館、二〇一〇年)一五三頁参照。このなかで栗林が「島津氏は南九州で天皇家の血を引く正統な「王」であるという主張に他ならない」と考察しているのは示唆的である。

(30) 重野安繹・小牧昌業著・講話会編『薩藩史談集』(講話会、一九一二年)一〇三—一〇五頁。重野自身は、始祖は惟宗氏であると結論づけている。薩藩史研究会編『重野博士史学論文集』中巻(雄山閣、一九三八年)五六—五六三頁。松沢裕作「重野安繹と久米邦武——「正史」を夢みた歴史家」(山川出版社、二〇一二年)七六—七七頁。

(31) 『本居宣長全集』第一〇巻(筑摩書房、一九六八年)二八八頁。

- (32) 白尾国柱『甕藩名勝考』（鹿児島県維新史料編さん所編『鹿児島県史料 甕藩名勝考』鹿児島県、一九八二年）一九二頁。白尾と宣長に関しては、青木満「近世後期の『神代三代』と南九州——本居宣長・白尾国柱と「神跡」の発見」（『日本思想史研究会会報』第二〇号、二〇〇三年）に詳しい。
- (33) 『三國名勝図会』第三卷（青潮社、一九八二年）二二〇—二二一頁。篤胤は『古道大意』などで最初に天孫が降臨した地を霧島山と読める文章も残しているが、その刊行は後年であり、『三國名勝図会』では当時刊行済の『古史成文』『古史徴』があげられている。青木満「八田知紀と平田派国学」（『日本思想史研究会会報』第三五号、二〇一九年）一二二頁参照。
- (34) 前掲報告（14）四二頁。
- (35) 青木前掲（33）では、『霧島山幽郷真語』について八田知紀を中心に詳しく検討されている。
- (36) 吉田麻子作成「平田篤胤略年譜」（米田・荒俣前掲（17）一三三—一三六頁）をもとにした。
- (37) 土屋昌明「平田篤胤の幽冥観と道教・神仙思想」（専修大学人文科学研究所編『人文科学年報』第三四号、二〇〇四年）。前田勉は「平田篤胤における「隠匿」観念」（『日本思想史学』第五四号、二〇二二年、一一二頁）のなかで、坂出祥伸の研究をもとに、篤胤の道教研究を「幽冥
- 説の思想的源流を遡っていった成果」としているが、本稿では敢えて発展的にとらえることを試みた。この議論は今後の課題としたい。
- (38) 杉本好伸「吉祥院本『稻生物怪録』——怪異譚の深層への廻廊」（三弥井書店、二〇二二年）三〇〇頁。『稻生物怪録』には諸本が多いが、ここでは篤胤の関与が明らかな吉祥院本を参照した。
- (39) 田原嗣郎『平田篤胤』（吉川弘文館、一九六三年）二〇四頁。山下久夫「平田篤胤における怪異「実在」論の意味」（『北陸古典研究』第三三号、二〇一八年）一二頁。
- (40) 小林前掲書（7）三一—三三〇頁。
- (41) 折口信夫「平田国学の伝統」（『折口信夫全集』第二〇巻、中央公論新社、一九九六年）。
- (42) 相良亨「日本の思想史における平田篤胤」（『日本の名著二四 平田篤胤』中央公論社、一九七二年）。斎藤英喜『折口信夫——神性を拡張する復活の喜び』（ミネルヴァ書房、二〇一九年）二八七—二八九頁。
- (43) 折口前掲書（41）四三七頁。小林前掲書（7）第二部第六「女学論」。
- (44) 鎌田前掲書（7）。彌永信美「平田篤胤と雑密儀礼学——『密法修事部類考』の予備的考察」（『蓮花寺佛教研究所紀要』第一六号、二〇二三年）の精緻なテキスト分析も参考にしたい。

(45) 宮地厳夫著・大久保千濤編『本朝神仙記伝』下之巻

(本朝神仙記伝発行所、一九二九年) 一三九—一四七頁。

斎藤英喜による一連の研究(斎藤前掲(7))。三ツ松前掲

(7)参照。

(46) 山下前掲(39)二〇頁。

(47) 後醍醐天皇は天保一〇年(一八三九年)入門の平田門人。彼の著書『神代三陵志』の説は、『古史伝』三一之巻に引かれている。

(佛教大学大学院)

(48) 宮本誉士「霧島神宮の近代——官幣大社列格及び勅祭社昇格運動の経緯」(『國學院大學研究開発推進センター研究紀要』第一三号、二〇一九年)。霧島神宮誌編纂委員会編『霧島神宮誌』(霧島神宮、二〇一九年)では霧島神宮に関してより広い視点で研究されている。

(49) 小林敏男「薩摩藩の神代三陵研究者と神代三陵の画定をめぐる歴史的背景について」(『鹿児島短期大学研究紀要』第四七号、一九九一年)。窪壮一郎『明治維新と神代三陵——廃仏毀釈・薩摩藩・国家神道』(法藏館、二〇二二年)。このほか、幕末から近代の史蹟・陵墓と地域の関係については、外池昇『幕末・明治期の陵墓』(吉川弘文館、一九九七年)。羽賀祥二『史蹟論——一九世紀日本の地域社会と歴史意識』(名古屋大学出版会、一九九八年)。高木博志『陵墓と文化財の近代』(山川出版社、二〇一〇年)。宮間純一『天皇陵と近代——地域の中の大友

皇子伝説』(平凡社、二〇一八年)など。

(50) 安丸良夫「近代転換期における宗教と国家」(『日本近代思想大系五 宗教と国家』岩波書店、一九八八年)。阪本前掲書(4)。羽賀祥二『明治維新と宗教』(筑摩書房、一九九四年)ほか。